Twinkle 東京女子医科大学学術リポジトリ
Tokyo Women's Medical University - Information & Knowledge Database
https://twinkle.repo.nii.ac.jp

Impact of Glissonean Pedicle Approach for Centrally Located Hepatocellular Carcinoma in Mongolia

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-01-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Chinburen, Jigjidsuren メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10470/31322

主 論 文 の 要約

Impact of Glissonean Pedicle Approach for Centrally Located Hepatocellular Carcinoma in Mongolia

モンゴルにおける肝中央部に存在する肝細胞癌に対するグリソン鞘一括処理肝切除

東京女子医科大学消化器外科学教室
（主任：山本雅一教授）
Jigjidsuren Chinburen

International Surgery 第 100 巻　第２号 268 頁～274 頁(平成 27 年 2 月発行)
に掲載

【目的】

モンゴルでは肝中央部に存在する肝細胞癌についてはこれまで半肝切除やより拡大切除を行ってきた。しかし、既存の肝障害のために高率に術後合併症を生じた。２００８年にモンゴルではグリソン鞘一括アプローチによる肝切除を導入した。グリソン鞘一括肝切除を導入することで、肝中央部に存在する肝腫瘍に対し解剖学的な区域切除が可能となった。従来の半肝切除拡大半肝切除とグリソン鞘一括アプローチ肝中央区域切除の比較検討を行った。

【対象および方法】

2003 年から 2012 年の肝細胞癌切除 820 例のうち、肝中央部に存在する肝細胞癌 69 例（8.4%）に対して検討を行った。半肝切除や拡大切除による従来の方法２４例と、グリソン鞘一括処理による肝中央切除４５例の２群に区分けした。年齢、性、血液生化学データ、凝固因子、肝炎のタイプ、Child-Pugh 分類、MELD スコア、腫瘍因子、手術時間、出血量、術後合併症、術後生存期間を計算した。

【結果】

背景因子の比較では、従来群で年齢が若い傾向があり、C 型肝炎の比率が高く、腫瘍径が有意に大きかった。腫瘍進展度、肝機能には差が見られなかった。術中因子の検討では、グリソン鞘一括アプローチ群で、手術時間が有意に長いが、出血量、輸血量に差はなかった。術後のデータでは、グリソン鞘一括アプローチ群で ALT 値が有意に低く、有意差はないものの肝不全、腹水、術後消化管出血、脳症、高ビリルビン血症などの合併症の比率が従来法に比べ低い傾向にあり、有意に在院日数が短縮した。なお術死率に関してもグリソン鞘一括アプローチ群で低い傾向にあったが有意差はなかった。術後の生存期間に関しても現在のところ有意な差はみられていない。

【考察】

肝腫瘍が肝臓の中央領域にある場合、従来は右あるいは左肝動脈門脈を肝門部で処理する半肝あるいは拡大半肝切除を行わざるを得なかった。しかし、余分な肝実質を切除するために、肝障害を併存する肝細胞癌では高率に術後肝不全あるいは肝機能低下による合併症を併発していた。しかし、グリソン鞘一括アプローチによる手術を導入することで、肝腫瘍が存在する区域だけを解剖学的に切除することが容易に可能となり、合併症を軽減し在院期間を短縮させた。

【結論】

グリソン鞘一括アプローチは肝中央部に存在する肝細胞癌に対して安全で有用な手術手技と考えられた。